

第1章 積丹周辺の縄文文化

神保秀太郎

1.1 北海道の縄文文化

1.1.1 縄文文化の始まり

温暖化の兆しが見え始める1万5000年くらい前になると、日本列島では縄文文化がはじまり、しだいに列島全域へと伝わっていった。北海道では、本州よりやや遅れて1万4000年前ころの縄文土器が発見されている。縄文文化がはじまって以降、北海道は南から北から海を越えてやってきた人や文化の交差点となり、縄文文化とそれを受け継ぐ続縄文文化が1万年以上にわたって続いた。

1.1.2 オホーツク文化

オホーツク文化は、3世紀から13世紀までオホーツク海沿岸を中心とする北海道北海岸、樺太、南千島の沿海部に栄えた古代文化である。このうち、北海道に分布している遺跡の年代は5世紀から9世紀までと推定されている。オホーツク文化発見は、1972年までさかのぼる。在野の学者であった米村喜男衛が、アイヌ文化研究のために訪れた網走でふと目にした河口岸の断崖がきっかけである。そこは貝殻が露出したまま層となって重なり、貝のほか石器、骨角器、土器、人骨などの出土品は、どれもが他に類例を見ないものだった。オホーツク文化はやがて、擦文文化へと吸収され、アイヌ文化へも受け継がれていくことになる。また、オホーツク文化はその時代の北海道の続縄文文化へ強い影響を与え、ストーンサークルなどにその影響が見られる。

1.1.3 北海道独自の歴史の歩み

約2300年前から（最近では約3000年前とも言われている）北部九州にはじまった水稻耕作を伴う弥生文化は、やがて本州北部まで広がった。

しかし北海道では稲作を取り入れず、縄文文化の特色を受け継ぐ続縄文文化へと続いた。北海道の続縄文文化は、5世紀ごろにサハリン方面から南下してきたオホーツク文化の影響を受け、さらに8世紀ころには本州の文化の強い影響を受けて擦文文化へと大きく変わった。そして14世紀頃にはアイヌ文化へと移行していく独自の歴史を歩んでいったのである。縄文以降アイヌ時代までの北海道は、自然を開発して都市を建設する文明の道ではなく、一貫して自然との共生を大切にする「循環と再生」の道を選択していった。

1.2 手宮洞窟

1.2.1 手宮洞窟の発見

手宮洞窟は 1866 年、石切りをしていた石工の長兵衛によって発見された。手宮洞窟周辺は、小樽軟石と呼ばれる凝灰岩が露出しているところで、長兵衛は建築用の石を探している途中で偶然、洞窟内の岩壁に様々な模様が刻まれている事を見つけた。この彫刻は 1878 年、榎本武揚によって学会に紹介され、さらにジョン・ミルンによって初めて学術的な観察と報告がなされた。また開拓使（現在の道庁）、渡瀬荘三郎（後に省三郎）

などによって次々と調査が行われた。その後、手宮洞窟は、前面の岩が削り取られ、また洞窟の上に鉄道が敷設されたりしたため、当初の姿を徐々に失っていったが、明治の中頃から雨除けのひさしをかけたり、その保存も行われてきた。1921 年には、その価値が認められ、国指定史跡となった。1949 年にはブロンズによる模刻と保存覆屋の整備が行われた。発見以来、風化、剥落の進行を防止し、貴重な文化財である手宮洞窟を後生に伝えるために、1986 年から保存修理事業を開始し、約 10 年の歳月を要し、1995 年に手宮洞窟陰刻面を保存する、「手宮洞窟保存館」を完成させた。

1.2.2 手宮洞窟とその時代

手宮洞窟に描かれている彫刻がいつ誰によって刻まれたのか。それが何を表現したのか、かつてはいろいろな説があった。しかし現在までに行われた様々な調査研究により、ある程度の事がわかるようになってきた。この彫刻が刻まれた時代は、発掘調査により、今からおよそ 1600 年前頃の縄文時代中頃～後半の時代で、本州の弥生時代の終わり頃から古墳時代の初めの時期にあたる。手宮洞窟の彫刻は、石斧などによって刻んだ後、磨いて仕上げたと推定される。発掘調査では、彫刻を刻んだ岩や縄文時代の土器と共に、刃の部分が傷んだ石斧も出土している。

図 1-1 手宮洞窟保存館



出所：手宮洞窟保存館 HP

図 1-2 縄文時代の土器



出所：手宮洞窟保存館 HP

1.2.3 手宮洞窟の彫刻

国内では、手宮洞窟のような彫刻は、現在のところ、フゴッペ洞窟にしか発見されていない。そのため、かつてはこれを「文字」として考え、「ルーン文字説」をはじめとしてさまざまな文字説が報告された。しかし、フゴッペ洞窟の発見以来、アムール川周辺に見られる、岩壁画と良く似た古代の彫刻であることがわかってきた。シベリアのサカチ・アリアン遺跡の岩絵とフゴッペ洞窟にはほとんど同じような舟の像が描かれており、手宮洞窟にも角のある人と似たものもある。このような岩壁画は日本海を囲むロシア、中国、朝鮮半島などに見られ、手宮洞窟もこのような日本海を囲む大きな文化の流れを表すものだと考えられる。

手宮洞窟の彫刻の特徴は、角のある人と思われるものが表現されている点にあるといわれている。壁面に刻まれた彫刻は、人の像をかなり忠実に模写したと考えられるものから、かなり抽象化したものまで、いくつかのグループに分けることもできる。さらに、手に杖のようなものを持った人や四角い仮面のようなものをつけた人が描かれている。このほかには、角のある四足動物が描かれている。このような角をもつ人は、シベリアなど北東アジア全域でかつて広く見られたシャーマン（激しい踊りや祈りをして占いや収穫のお告げなどをする人）を表現したものではないか、という説が有力である。手宮洞窟はこの様に4～5世紀頃、北海道に暮らしていた続縄文文化の人々が、日本海をはさんだ北東アジアの人々と交流をしていたことを示す大変貴重な遺産である。

手宮洞窟保存館ではカプセルで保存された彫刻（陰刻画）を実際に目にすることができる。また世界各地の洞窟壁画や手宮洞窟の時代である続縄文文化の生活の様子を知ることができる。

1.3 フゴッペ洞窟

1.3.1 フゴッペ洞窟の発見

図 1-3 手宮洞窟陰刻画（実物）



出所：手宮洞窟保存館 HP

図 1-4 手宮洞窟陰刻画全体図（模写図）



出所：手宮洞窟保存館 HP

余市湾の海岸近く、地元では丸山と呼ばれている丘陵の麓に洞窟が開いたのは、1950年の春である。海水浴に来ていた札幌の中学生が偶然洞窟に入り、内部に彫刻された壁画を発見した。発見時は、子供が腹這いになってやっと通れる程の穴だったそうである。正式な発掘調査は、1951年から1953年にかけて行われた。その結果、洞窟は開口、奥行きともに7m、高さ8.2m、内部には6.5mの高さで貝層が堆積しており、十数基の炉跡や、縄文時代後半（本土の編年では古墳時代に相当する）の土器や石器、骨角器が大量に出土した。洞窟は岩質がもろく彫刻の風化が著しいため、1972年に、日本で初めてのカプセル保存方式を採用し、温度・湿度を一定に保つようにした保存施設が建てられた。

1.3.2 フゴッペ洞窟と岩面刻画

彫刻は、爪で傷がつくほど柔らかい凝灰岩の壁に彫り込まれており、その数は609に達し、同時代の小樽市手宮洞窟の規模を大きく上回っている。中にはベンガラが赤く施されたものもあった。描かれた彫刻には、角・翼を持った動物の仮装をした人物像、舟と漁師、狩人、魚、四足獣や海獣のようなものを表現したものもあり、シャーマン的な要素が強く、フゴッペ洞窟自体が古代人の宗教的儀礼の場であったと見られている。

図 1-5 フゴッペ洞窟



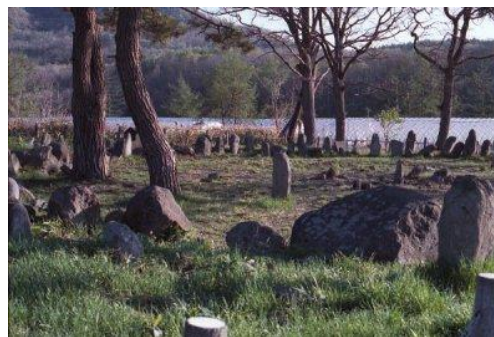
出所：フゴッペ洞窟

1.4 忍路環状列石

1.4.1 忍路環状列石

忍路環状列石の造られた時期は今から約3500年前の縄文時代の後期である。1861年、小高い山の麓に大きな石をいくつも円形に建て並べた遺構（ストーンサークル）が発見された。大きさは現在の指定の面積で821㎡、直径は南北約33m・東西約22mの楕円形でサークルは2～3mの幅に高さ10～20cmの小石を環状に重ね置き、その内側に高さ100～200cmの大石を配置されている。1886年の報告には、小高い山は「三笠山」と呼ばれており、その為古くは「三笠山環状石籬」と呼ばれていた。

図 1-6 忍路環状列石



出所：忍路環状列石 HP

1.4.2 忍路土場遺跡

忍路土場遺跡は、国指定忍路環状列石の北西 100m にある広域農道を作る際に発掘された。低湿部は、この小河川の側方浸食で台地端が削られた湾入部に存在、豊富な水分を有する黒色腐植泥と砂の互層が 1～1.5m の厚さで堆積し、約 1000 m² に 20 万点を越える遺物がパックされたような状態で埋蔵されていた。そのため、さまざまなロープや繊維製品が出土した。巨木材や建材・板などの木製品・繊維製品を作る技術の高さから、簡易的な水利工事を行う技術レベルには十分達していたものと思われる。

1.5 西崎山ストーンサークル

余市町と小樽市の境界となる西崎山の尾根には環状列石（ストーンサークル）と呼ばれる人頭大や幼児の頭ほどの石を円形に並べ、中心に棒状の石を立てた特殊な遺構が見られる。大小 100 個ほどの自然石が集められ、その中に直径 1～2m の環状に配列された 7 基のストーンサークルがある。出土品、構造、穴の中の燐分から云って、縄文時代後期（3500 年前）の墳墓であろうと推定されている。現在は道指定遺跡となっている。

図 1-7 西崎山ストーンサークル



出所：小樽市 HP

参考 HP

小樽市 HP

<http://www.city.otaru.lg.jp/>

小樽市手宮洞窟保存館

<http://www.mmjp.or.jp/OTARU/kyoyou/jtedou.html>

国指定史跡 忍路環状列石

<http://www.mmjp.or.jp/OTARU/kyoyou/jstone.html>

参考文献

北の考古学散歩/野村 崇

洞窟遺跡を残した続縄文の人々/北海道開拓記念館